

三月遊び楽み会

うふたき会

若さと笑顔そらうの

文 阿川尚之 写真 鈴木勝

地域は舞台 うふたき会と小浜島ばあちゃん合唱団 (沖縄県竹富町)



「タピスカロイ」 を祈る人たち

沖縄県竹富町小浜島への旅

うふたき会と小浜島ばあちゃん合唱団

1993年、島のおばあちゃんたちに昼食を食べながら楽しい時間を過ごしてもらおうとボランティアグループ「うふたき会」が誕生。自然発生的におばあちゃんたちが大好きな歌や踊りが始まる。入団資格80歳以上のおばあちゃん合唱団として徐々に有名になり、東京や大阪、北海道などでも

公演を行う。2013年、サントリー地域文化賞受賞。2015年、「小浜島ばあちゃん合唱団」の頭文字と平均年齢84歳をとったアイドル・グループ「KBG84」として大手レコード会社からCDデビュー。竹富町観光大使。竹富町は、小浜島、竹富島、西表島、波照間島などを含む。



石垣港離島ターミナルと小浜港を結ぶ高速フェリー。片道約30分、朝7時から夕方6時まで、1時間に2本程度運航している。



大岳展望台から眺める加屋真島(手前)と石垣島。眼下にはサトウキビ畑と牧草地が広がる。

小浜節

だんちよ てゆまりる
 小浜こふし ている 島や
 大岳うふだき ば くしやでい
 白浜 前なし

(世に誉れ高い 小浜島は、大岳を背に、白浜を前にしている)



雨の小浜島

小浜島は本降りの雨だった。空から水がどつさり落ちてきて、べたべたと体にまといつく。蒸し暑い。南国の明るい太陽と青い海は、どこにもない。

小浜島は、八重山諸島の石垣島と西表島のあいだに挟まれる周囲一六キロほどの小さな島である。高台に上がれ

ば、周囲の島々が八重に重なって見えるので、八重山(地元では「ヤイマ」と呼ぶのだろう)。

小浜島には現在約六〇〇人の島民が住んでいる。ボランティア組織「うふたき会」の活動の一つとしてはじまったおばあちゃん(オバア)合唱団が、いつしか注目されるようになる。二〇一三年にサントリー地域文化賞を受賞し、今やKBG84という名前で大手のレコード会社からCDを出すまでになったこの合唱団の歌声を聴くために、南の島へやってきた。KBGは、「小浜島ばあちゃん合唱団」の略。84はメンバーの平均年齢を示す。島に到着して最初に話を聞いたのは、この合唱団を世に送り出したつちだきくおさんである。

島へ来た人

つちだきさんは九州大分県出身のプロ

のミュージシャンで、現在六〇歳。数々の有名歌手を生んだヤマハ・ポピュラーソング・コンテストの九州大会に出場した縁から、ヤマハが(当時)経営するリゾートホテル・はいむるぶしで歌う仕事をもらい、三一歳のとき初めてこの島へやって来た。

最初は島がいやで仕方なかった。不便だし、遠い。中央で有名になりたいという野心もあった。もう一度だけと決めてはいむるぶしで歌い、ようやく九州へ戻ったのに、島のことが妙に恋しい。結局一九九〇年夫婦で移住。小浜島を拠点に全国へでかけ、ライブ活動を続けている。

そんなつちだきさんを、島の人たちは段々と受け入れるようになる。ある日、オバアたちのリーダー格である花城キミさんに呼び出され、染色を手伝え、糸を一〇〇〇回染料につけると命じられた。島では年上に逆らえない。仕方



はいむるぶしのロビーコンサートで歌うつちだきくお氏。ほぼ毎晩、2回の公演を行っている。

なく黙々と作業をしていたら、何回や
ったかと聞かれた。三〇〇回と答える
と、そんなにやらなくていいのと言
われた。

そのキミさんから指導を頼まれたの
が、オバアたちの合唱団だった。つち
ださんは文字通り手取り足取り、歌唱
指導を行った。はいむるぶしのステー
ジや石垣島の施設で歌わせ、東京やシ

ンガポールでK B G 84としてのコンサ
ートを実現し、オバアたちの夢をかな
え、元気を引き出した。

三月遊びの朝

翌朝目をさますと、雨は上がってい
た。少し時間があつたので散歩に出る。
宿先の民宿だいく家は、島の中心に
位置する本集落の一角にある。数百メ
ートル歩けば民家は切れて、さとうき
び畑や牧草地が広がり、その向こうに
海が見える。

人影がまつたくない。民家を覗いても
人の気配はしない。それでも辺りはむせ
返るような生命力に溢れている。あち
こちでハイビスカスの赤い花が開き、
南国の植物が生い茂る。それらすべて
がまぎつたような、ほのかな甘い香り。
放し飼いの鶏が時を告げて鳴き、道
ばたでヤギが草を食む。森のなかか



ら、聞いたことのない鳥の鳴き声が聞
こえる。ハブやウサギや、いろいろな
動物、もしかすると精霊や魔物までも
が潜んでいて、こちらの様子をうかが
っている。

脇道を初めて見る鳥が、はりがね細

工のような長い足で走り抜けた。「し
ろはらくいな」という種類らしい。ふ
と脈絡もなく、アリスがウサギの穴に
あやまって落ちて訪れた、「不思議の
国」を思い出した。この鳥も小浜島の
ことばで「遅れる、遅れる」とつぶやき
ながら、駆けていったのかもしれない。

島へ戻った人

午前中、うふたき会の生みの親であ
る花城キミさんに、ご自宅話を聞いた。
数年前から足が不自由になり石垣
島のケアセンターにいるが、行事があ
ると島へ戻る。自宅の居間の真ん中で、
仏壇を背にいすに座つてくつろぎなが
ら、花城さんは「やつぱり島はいいね
え」と何度もつぶやいた。

小浜島で生まれた花城さんは、夫が
竹富町役場で職を得たため島を去つて
長年石垣島で暮らした。六〇歳で自分

自身の定年を迎え島に戻ったとき、夫
に先立たれ孤独な老齢の婦人たちの力
になりたいと考え、一九九三年、三人

の仲間と一緒にうふたき会の活動をは
じめた。竹富町社会福祉協議会の照屋
照子さんのサポートを受け、毎月一度
の食事会を開始。島で最
初のデイケアであった。
さらに島の女たちが毎年
旧暦の三月三日に浜へ下
り、歌つて、踊つて、一緒に
食事をする、「三月遊び」
という島の古い風習を復
活させる。オバアたちの
合唱も始めた。そしてつ
ちださんに出会う。

花城さんはつちださん
のことを、「上等な人さ
」と褒める。東京でつちだ
さんのお母さんに初めて
会ったとき、「つちださ
んを生んでくれて、あり
がとう」と言つたそうで
ある。



伝統的な琉球建築の自宅できつろぐ花城キミさん。壁面には孫やひ孫たちの命名書がびっしり。



三月遊びのオバアたち

一休みした花城さんと一緒に「お楽しみ会」の会場につくと、そこそこに座るオバアたちから拍手が起きた。化粧がすみ今日の衣装に着替えたうふたき会のメンバーたちは、椅子に座って輪をつくり、「ゆんたく（おしやべり）」の最中である。その中には、全国のファンをその笑顔で魅了する九四歳の目仲トミさんがいる。



KBG84のセンターを務める目仲トミさん。

目仲さんはいたって小柄な女性で、

アたちの手が自然に動きはじめ、目仲さんや最高齢の山城ハルさんらが踊りはじめた。オバアたちの笑顔が輝く。

研修生で司会の松原さんが開会を宣言し、入場したのは短パン姿のオバアたち。曲は「仲良し小道」。「ランドセル背負って元気よく、お歌をうたって通う道」と、八〇年ほど前に小学校へ入学したのを思いだして歌う。

そのあと、うふたき会名誉会長の花城さんがすわったまま挨拶した。感極まったのか、小浜島の言葉で話す。一言もわからないけれど、美しい響きであった。

それから二時間、童謡からはじまり古い歌謡曲、目仲さんの講談、島の歌と踊りと、オバアたちの演し物が続く。目をつむって島の音楽を聴いていると、やわらかな風が通り抜けるような心地がする。

演目の順番はころころと代わるけれど



ステージに上がれない人たちも「くまチーム」として熱演

ども、みな一所懸命である。つちださんが走り回って指示を与える。ただし、ステージにはほとんど上がらない。気がつくともプログラムにも会場にも、KBG84という言葉は一つもなかった。そして最後はつちださんとオバアた

そのうえ腰が曲がっているから、話をするにはこちらがしゃがみこまなければならぬ。同じ高さで向き合い、目を合わせると、年輪を刻んだ皺をくしくしくやにして、実に楽しそうに笑う。会が始まるまえに、記念撮影をした。みんなが着ている赤いポロシャツは、うふたき会の制服である。この会には八〇歳にならないと入れない。七九歳以下の若手は青いシャツを着て、研修生としてうふたき会の活動を手伝う。最初は表情が固かったけれど、つちださんが三線を弾きはじめると、オバ



小浜島独特の鉢巻



ちが一緒に作詞した「カモナダンス小浜島」を、オバアたちがステージ一杯に広げて歌う。K B G 84がCDとDVDでメジャーデビューした歌と踊りである。トミさんがひととき目立ちまくって、余興の部はめでたく終わった。食事の部でゆんたく再開である。

働くオバアたち

島を出発する日の朝、白保夏子さんの話を聞いた。白保さんは花城家との話の、赤い瓦の家に住んでいる。

うふたき会創立のとき花城さんを助けた三人の一人で、長く花城さんの相談相手をつとめてきた。

白保さんは家の裏にある別棟の作業場で、すでに機を織っていた。暇があればここへ来て、子や孫のために反物を織り着物に仕立てる。複雑な工程であるが、白保

さんは笑みを絶やさず、話をしながら休みなく手を動かす。

それにしても、島の女性たちはよく働く。朝早く起きて火を起し、米を炊き、三度の食事を用意する。夫、子ども、親の面倒を見る。夫の仕事を手伝い、副業をして家計を支える。祭りには歌を歌い踊りを踊り、選ばれた女性は島の神事をつかさどる。戦争もあった。食料難もあった。台風もくる。ゆっくりする暇がまったくない。小浜島の女性は昼寝をしないという。それ



祭りでは島の伝統衣裳を着なければならぬ。その布はすべて女性たちの手づくりだ。

でいて男尊女卑のこの島では、年配の女性は酒を一切口にしない。

若いときから働き続けてきた彼女たちだから、七〇歳になっても八〇歳を過ぎても、自然に体が動く。ただ健康にめぐまれ元気で八〇歳を迎えれば、仕事をしろとはもう誰も言わない。働き

づめだった彼女たちが、肉体的精神的に解放されて、初めて自由の味を知る。

島を去る人

うふたき会は、K B G 84は、これからもずっと続くのだろうか。最後に話を聞いた大久敏さんは、懐疑的である。

大久さんは、他のオバアたちとは一味違う、謙虚な、前に出たがらない人だ。現在七六歳。二五年間横浜に住んだあと息子と共に島へ戻り、民宿だいく家を営む。花城さんから毎日熱心に誘われ、うふたき会に研修生として加わった。民宿の仕事との両立は大変だが、食事会でオバアたちから「おいしかったよ、ありがとう」とこにこして言われると、嬉しい。

その大久さんが、意外に冷めた目でうふたき会を見ている。あと4年で自分がメンバーになるときに、会そのもの



本番前の軽食用にジュシー(沖縄風炊き込みご飯)のお握り作り。青いTシャツは80歳未満の研修生。



があるかどうかわからないと言う。そもそもボランティアをする人がいない。若い人がいないし、いても忙しい。青年会の活動とも重なる。

つちださんも、うふたき会や合唱団がこのまま続くかどうかかわからないと言う。本人自身、いつまでこの島にいらるか決意していない。島には二〇人の母がいるが、郷里にも八二歳の実の母がいる。今は元氣だが、いつかは世話をしに帰らねばなるまい。



民宿の食事は大久敏さんの手づくり。現在、「うふたき会」副会長。

タピスカロイ小浜島

大久さんにとつちださん別れを告げ、フェリーで小浜港を離れて、旅は終わった。私は三日で去るけれど、誰もがいつか島を去る。うふたき会のオバアたちも、夫が一足先に島を去るのを見送った。KBG84のキャッチフレーズは、「天国にいちばん近いアイドル」だが、オバアたちはその本当の意



子や孫、ひ孫も集まり、なにくれとお世話をしていた。

味をよく知っている。

しかしだからこそ、島を去るまでの時間を楽しみ、自由を満喫して、あんなにほがらかに歌い踊るのかもしれない。そしていつか、オバアたちは南の空を埋め尽くす無数の星、土地の言葉で、「はいむるぶし」(南群星)になって輝く。

つちださんが昨夜、はいむるぶしのロビー・コンサートで最後に歌ったのは、自作の「タピスカロイ」という曲である。「タピ」は旅、「カロイ」は幸せ。



島の女たちは「あなたの旅が幸せで平穩でありますように」と祈って、島を出る男にこう声をかけるのだという。

だから、オバアたち、つちださん、そして小浜島の森の奥でうごめくウサギ、くいな、やもり、ハイビスカスやバナナ、島の守り神である弥勒様、福祿寿様、精霊、魔物の諸君よ。ミーハイユー(ありがとう)。心から、「タピスカロイ」。

(あがわなおゆき・法学者、エッセイスト)